



地域を潤す「片樋のまんぼ」探訪

いなべ市大安町 片樋境界

まんぼとは、素掘りの地下水路のことで、その深さは5〜7メートル程度。また、水源は主に3種類あり、湧水(地下水)・川の水・溜池の水を利用しています。江戸時代には、鈴鹿山麓のいなべ市から鈴鹿市にかけて盛んに掘削が行われ、地域に恵みをもたらしました。先人たちが長年にわたって築き上げ、貴重な文化遺産でもある、まんぼですが、近年は数が減少しています。そうした中、今も8ヘクタールもの水田を潤し続けているのが、大安町片樋地区にある「片樋のまんぼ」です。

今回は、市の文化財および史跡に指定されている「片樋のまんぼ」と、ゆかりの地を巡ります。

取材・文：中村真由美

「おかげ参り旅立ちの地」

今回の散策は、三岐鉄道三岐線「丹生川」駅から始まります。「まんぼは地下水路のため、一般には内部を見ることはできませんが、『片樋のまんぼ』には、見学可能な場所があります。途中で神宮ゆかりの地もあります」とのお話で、駅舎を後にして南東へと進みます。しばらくの間、住宅地を歩くと、石燈籠が



石燈籠



「おかげ参り旅立ちの地」



今回の案内人は「ふるさといなべ市の語り部の会」会員の伊藤 美善(みよし)さん。片樋生まれで、地域の歴史に精通しています。



■ 行程図 所要時間／約2時間 ※所要時間は、おおよその目安です。	
START	
三岐鉄道三岐線「丹生川」駅	約600m → 「おかげ参り旅立ちの地」 約700m → 「片樋のまんぼ」「間風顕彰之碑」 約100m
三岐鉄道三岐線「三里」駅	約1300m ← 教楽寺 約400m ← 大神社 約100m ← 庄屋墓地 約600m ← 「片樋のまんぼ」出口

見えてきました。ここは、お伊勢参りの出発点であり、村人総出で代参者を見送り、出迎えた場所でもありました。さらには、参宮できない人たちが、この地で遙拝したのです。

平成12(2000)年に「おかげ参り旅立ちの地」として整備された一面に別れを告げて再び歩くと、やがて光景は一変し、周囲には田園風景が広がります。すると、あちこちに「片樋のまんぼ」の案内



昭和59(1984)年建立の「間風顕彰之碑」

板が目につくようになりました。これらに導かれて歩くと、「間風顕彰之碑」と刻まれた石碑などに出迎えられました。「間風とはまんぼのことで、間歩・間保などど書く場合もあります」と教わります。まんぼの起源は定かではないものの、いなべ市内には、江戸時代に銀や銅の採掘で隆盛を極めた治田鉦山があり、鉦石を採取するための坑道(間府)を造る技術が発達していました。その技術が農民に伝わったとも考えられています。

先人たちの汗の結晶

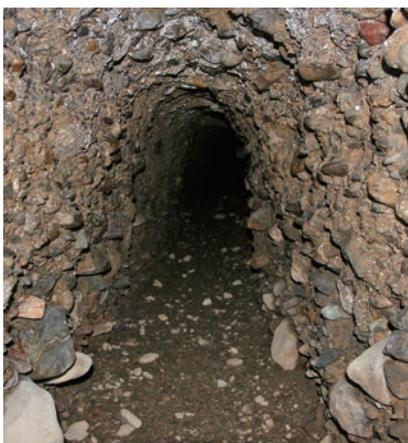
「では、安全に気を付けて見学しましょう」と促されて石碑脇の階段を下りていくと、目の前にまんぼが出現。その幅は1メートル、高さは1.5メートル程度。かがんだ姿勢で奥へと1、2歩入ってみ



「片樋のまんぼ」

ると、意外にも温かく感じました。内部の気温は一年を通して18度前後のため、冬期には温かく感じるのだと教わります。また、水温も16度前後のため、大寒のころに堆積した土砂などを除去する「まんぼ浚え」を行う際も、寒さは気にならないといえます。

ところで、片樋地区でまんぼの掘削工事が行われたのはなぜなのでしょう。同地区は三方を員弁川・青川・源太川に囲まれているものの、高台に位置するため、古くから十分な農業用水の確保が難しい状況でした。そこで考えたのが、地下の湧水などを集めて利用する横井戸式の水路だったのです。



まんぼ内部の様子

工事に着工したのは、明和年間(1774~1772)末期のこと。当時の庄屋・富永太郎左衛門が中心となり、村民一丸となって進めましたが、狭くて暗い中を、ツルハシやトグワを使って掘っていくのは、並大抵のことではなかったでしょう。完成までに実に5年もの歳月を要しました。

しかし、地域に再び苦難が襲います。約80年後の安政の大地震で水の出が悪くなったのです。そのため、文久2(1862)年に時の庄屋・二井藤吉郎が改修と延長工事を実施。その結果、総延長は約1キロメートルに達し、全国でも有数の規模となりました。



まんぼの出口

恩人たちが眠る

「次は、2人の庄屋が眠る墓地に行きますが、その前に出口も見てください。おきましよう」との案内で、住宅地の



庄屋墓地

細い道を進みます。お話のまんぼの出口は、現在は江戸時代の姿を留めてはいますが、地上の水路をさらに流れて、8ヘクタールの広さの水田を今も潤しているのです。

まんぼの出口からは、方向を北東へと変えて歩きます。しばらくすると、「まんぼ掘削の恩人富永・二井公の墓地」と記した案内板が目につきます。

りました。墓地では、工事のために私財をつぎ込んだ2人の庄屋、富永太郎左衛門と二井藤吉郎の名前を刻んだ墓石を見つけることができました。

静かにたたずむ2基の墓石に手を合わせた後は、「片樋の歴史に欠かせないおまのせう、きょうくし大神社と教楽寺にも寄って行きましよう」と案内されて、一旦来た道を戻ります。お話の大神社は墓地のすぐ近くに鎮座していましたが、江戸時代の大旱魃の際に雨乞いをしたところ、大雨が降ったと伝わ



大神社境内の池沼



大神社

ることから、「雨乞いの宮」としても知られます。境内には美しい池沼があり、水神様が祀られていました。

そして教楽寺には、奈良時代の高僧、行基(668~749)にまつわる伝承が受け継がれています。伝承とは、水路の漏水に悩んでいた村人に、L字型の樋(片側の樋を架けて水を流す方法を教えたというもの。これが片樋の地名の由来となったと伝わります。境内には、行基が詠んだとされる歌「茂留漕



教楽寺



昭和43(1968)年に建立された歌碑

美津片樋天登遠世登教留遠聞天耕寸民曾樂武」を刻んだ歌碑もありました。現代文では「漏る井水片樋で通せと教ゆるを聞きて耕す 民ぞ樂しむ」となります。片樋の人々にとって水不足解消が、何よりも大切で嬉しいことなのだと思えて理解できました。

教楽寺から、今回の散策の終点、三岐鉄道三岐線「三里」駅までは、徒歩16分程度。地域の人々が200年以上にわたって大切に守ってきた「片樋のまんぼ」探訪は、これで終了です。

問「ふるさといなべ市の語り部の会」

TEL 090-3583-2827

(伊藤 忠代表)